

## シャロレ伯爵 (4)

リヒャルト・ベア = ホフマン著  
松川 弘\*・訳

(平成28年10月31日受付)

### Der Graf von Charolais (4)

von  
Richard Beer-Hofmann

Aus dem Deutschen  
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Oct. 31, 2016)

裁判長：

やめなさい。

急ぐ必要はないんだよ！

(デジレーを引き寄せ、その額にキスして、胸に押し付けられた彼女の頭を撫でながら、小声で)

他人がお前にお祝いを述べる前に、言っておこう。

このきれいな額、熱い子供の頬、明るい眼、すっきりした、憂いのないこめかみを、お前がこれからも保ち続けられますように。

(彼女を離し、溜息をついて)

出来る限り長く！

(贈り物を指し示して)

あとで見ておきなさい。

(彼女と一緒に窓辺に歩み寄る。彼女の後ろにバルバラが続く。淡い色の薔薇が下から投げられ、張り出しに落ちる。最初は一本、次第に多くなる。デジレーは、後ろに下がる)

デジレー：

もうそれ位で十分よ！

バルバラ：

花がまだ露に濡れているので、ビロードが台無しになってしまいますよ！

デジレー：

(窓敷居の上に身を乗り出して)

あなた、どうやって入ってらしたの、フィリップ？  
庭の門は、閉まってたでしょう！

フィリップ：

梯子を使ったんだよ！

よく聴いてなさい！

今から最後の楽章が始まるんだ！

これが一番きれいなんだよ！

デジレー：

待って、まだ駄目よ！

中庭の扉の鍵をお渡しするわ。

私の部屋の窓の前で演奏して下さらないこと。

バルバラが服を着せてくれている間、聴いてほしいの。

それから 上がってきてくださいな。

フィリップ：

楽士たちを連れて行ってもいいかね？

そのうちの二人は、君もよく知ってるはずだよ！

デジレー：

(うなずいて)

\* 広島工業大学工学部電気システム工学科

もちろん、いいですとも。

あの人たちが中庭で演奏してるのは、私たちが今年の冬に踊ったバヴァーヌね。

フィリップ：

そうだ！

これは彼の作曲だ。

もうひとり——今真っ赤になってるが——彼の作ったリートは、僕が君にあげたものだよ。

デジレー：

『ケファルスとプロクリス』ですか？

あれはとてもきれいだから、よく歌うのよ。

それじゃ、また後でね！

(彼女は窓から引っ込み、裁判長に伴われて、自分の部屋のドアのところへ行く。後ろに、かき集めた薔薇の花束をもったバルバラが続く)

あとの二人は誰なの？

バルバラ：

救貧院の裏の居酒屋にたむろしているならず者ですよ。

(裁判長に)

もうご存知とは思いますが、あそこでダンスの音楽を演奏している者たちを、フィリップ様が、この真っ昼間に引っ張り回してらっしゃるんです！

後見人として、叔父として、ご注意くださいましな。

デジレー：

(すでに部屋の中にいて、呼び掛ける)

バルバラ！

バルバラ：

今すぐ参りますよ！

(立ち去る)

(裁判長は書架から本を一冊取り出して探し物をする。質素だが入念な身なりの書記が入ってくる。彼は、まるめた文書と、書類かばんをもっている。彼の礼儀正しい遠慮深さの底には、穏やかな自意識が認められる。彼は、近づいてくる裁判長にお辞儀をする)

裁判長：

こんなに早く何だね？

書記：

(書き物机の前に立ったまま作業する)

九時から会議がありますので、閣下の書類を前もって整理

しておこうと思ひまして・・・。

裁判長：

そうか！

それじゃ、ここに印を付けておいた二ページを書き抜いて、付け加えておいてくれ。

昨晚、管財人が財産の計算書を持ってきた。

それを君に渡しておこう。

家で目を通しておいてくれたまえ。

午後は来なくていいよ。

何を持ってきたのかね？

(丸めた紙を指差す)

書記：

お嬢様への・・・。

裁判長：

(親しげに彼に笑いかけて)

娘の誕生日を忘れずにいてくれたんだね。

君がここに来てから、もうどれ位になるかな？

書記：

八年になります！

裁判長：

そうだな。

君が来たのは、彼女が十歳のときだった。

君は娘に詩を書いてくれて、彼女はそれをいたく自慢していた。

君はまだ覚えているかね？

君の子供たちは今何歳なんだ？

書記：

息子が十歳で、娘が五歳と七歳です。

裁判長：

みんな健康かい？

奥さんは元気なのか？

(書記はうなずく)

そうか！

これが計算書だ！

(彼は自室に入る)

(フィリップが楽士たちを連れて、庭の扉を通して入ってくる。彼は床から薔薇の花を拾い上げ、一瞬、贈り物の置いてある机に目を遣る。オーボエとヴァイオリンの奏者はボロボロの服を、他の二人は、上品な服を身に付けている。

みんな各自の楽器を持っている)

フィリップ：

(あたりを見回す)

彼女はまだ着替え中だ！

お前さんたちは、むしろ庭に臨んだ広間で彼女を待っていたほうがいいんじゃないか？

どうだね？

そして下で朝食をとるんだ！

(二人の身なりのいい楽士たちは見つめ合う)

そんなに考え込まなくてもいいだろう！

(裁判長の部屋から出てきた召使いに向かって)

君！

この方たちを下の庭に臨んだ広間へ案内してあげてくれ！

そこで朝食をとると、バルバラに言ってくれないか！

(二人の楽士はうなずいて、召使いの後に続く。召使いは彼らを連れて庭に下りる。オーボエとヴァイオリンの奏者も彼らに続こうとする。フィリップは彼らを引き止める)

あんたたちは行かない方がいい。

あの二人は、おれたちのような者には上品過ぎるし、おれたちも居心地がよくないからな。

晩にまた会えばいいさ！

第一の楽士：

その方が利口だね！

第二の楽士：

あんたは五日もおれたちの所へ来なかったな！

第一の楽士：

その通りだ！

ジビレは、あんたにぞっこん惚れ込んでから、泣き喚いて、誰とも踊らないし、——みんなの前で——ペーターに、自分はフィリップしか愛していないって断言したんだぜ！

フィリップ：

「愛している」！

どういうつもりなんだ？

おれが彼女と一度寝たから、彼女はそう思い込んでるか？

馬鹿な！

彼女、もうその位の分別がついていいはずなんだがな！

第一の楽士：

彼女は、他の者とはお金のために付き合ってるが、あんたは彼女の「愛しのひと」なんだ。

第二の楽士：

彼女、あんただけを真底愛してるからな！

フィリップ：

「真底」から？

そいつはいい！

「愛しの人」か！

いい役回りだな！

ありがたい！

おれは今晚は行かないよ！

あばよ！

第一の楽士：

ジビレが可哀想だよ。

フィリップ：

またな！

第一の楽士：

あの馬鹿女は・・・。

第二の楽士：

もう放っておけよ！

むしろ、彼は来ないほうがいい！

フィリップ：

何だって？

第二の楽士：

えっ？

フィリップ：

あんた、今何と言った？

第二の楽士：

おれがかい？

フィリップ：

君だ！

第二の楽士：

おれが？

別に何も！

フィリップ：

おれは来ないほうがいい、って言ったじゃないか！

第二の楽士：  
確かにそう言ったよ！

フィリップ：  
なぜ来ないほうがいいんだ？

第一の楽士：  
奴が誓ってるからさ！

フィリップ：  
一体誰が？

第一の楽士：  
ペーターさ！

ジビレがフィリップさんと踊ってるところをもう一度見たら、二人を刺し殺してやるって、奴は誓ったんだ！

第二の楽士：  
居酒屋の主人がダンスの前に食器や包丁を素早く仕舞い込まなかったら、この間も奴は危うくそうするところだったんだ！

そう奴は言ってたぜ。

フィリップ：  
食事に使うナイフじゃおれは刺し殺せないって、ペーターに言っときな！

(飾りの付いた短刀を差し出して)  
この短刀がちょうどいい！  
これを奴に贈ろう！  
今晚おれは行くぜ！  
ジビレに言っといてくれ！  
おれにせいぜい貞節でいろってな！

第一の楽士：  
フィリップさん！

フィリップ：  
黙れ！  
おれ以外の誰も愛すんじゃないってな！  
あばよ！  
(ドアに向かって手を振りながら彼らを見送る)  
聞いているのか？  
おれだけだぞ！  
熱烈に、誠実に、深くってな！  
(すでに外にいる二人に向かって、あとから叫ぶ)  
心からだぞ！

(暖炉の左手のひじ掛け椅子に腰を下ろして、ものうげに薔薇の匂いをかぎ、指輪を直して、ものうげに頭を書記の方に向ける)

お早いですな？

書記：  
(立ち上がり、堅苦しくお辞儀をする)  
フィリップ様、おはようございます！  
(再び腰を下ろし、引き続き、書類を整理したり、書き物をしたり、ペンの先を切ったりしている)

フィリップ：  
(微笑みながら)  
なるほど「おはよう」。  
おれはそれを言わなかったかね？

書記：  
(極めて丁寧に)  
当然、そうおっしゃられたのでしょうか。  
私は聞き漏らしておりました。

フィリップ：  
(間を置いて)  
詩人君、おれに何か文句でもあるのかい？

書記：  
(眉を少ししかめて)  
私はあなたに出来るかぎりの敬意を表しているんですよ。  
フィリップ様、私はあなたの叔父様に雇われている書記に過ぎません。  
どうか、職務上の肩書きで私をお呼びください！  
お願いします！

フィリップ：  
(恭順を装いながら)  
仰せの通りに致します！

書記：  
お願いします、そう私は申したはずですよ。

フィリップ：  
(微笑みながら)  
そうは言ったが、おれには、まるで命令するように聞こえたがね！

書記：

（愛想よく）  
よいお耳ですね！

フィリップ：  
（同じように愛想よく）

いやいや、君の言い方がちょっと無作法だっただけさ。

書記：  
（慎重に）

そうした上品な言葉の響きが、空中を優雅に擦れ違っていくとすれば幸いなのですか？

フィリップ：

いや、おれが知りたいのは、あんたがおれに……。

書記：

それがどうしたとおっしゃるんです、大したことなのですか？

フィリップ：  
大したことさ！

（立ち上がって背伸びをし、話しながら窓辺に向かい、そこで向きを変えて、書き物机に向かう途中で立ち止まる）  
あんたは、素晴らしい文章家だ——今おれはあんたにお世辞を言うつもりはないが——ただ、おれが言いたいのは、ここに一人の人間、詩人——またこの言葉を使ってしまった、済まない——が座っていて、彼が、その技量からすれば当然だが、言葉や語調、身振りを、普通の人間よりも重視するのに慣れているってことだ。

それは、そうしたものが、あんたが人間を描写するときの素材になるし、あんたがそれ以上のものを持っていないからなんだ！

あんたの言葉がいちいち人を立腹させ、刺激し、苛々させるとしたら、それは、彼がその言葉を、彼の嫌いな、あんたの心の奥底にある何かの表われとみなしているからだろう。

（書き物机の前のひじ掛け椅子に座り、テーブルに身を乗り出して、書記のそばで、勝ち誇った微笑みを浮かべて）

おれが知りたいのは、まさにその何かなんだよ！

書記：  
（微笑みながら）

フィリップ様、つまりあなたは——少しばかり粉飾しておられるようですが——若い娘がよく質問するようなこと、「あなたはわたしのことをどうお思いですか？」という問いを私になさるんですかね？

フィリップ：

（自分の眼で、書記の眼を探るように）

彼女が誰にそう尋ねるのか、あんたお分かりかね？  
彼女が獲得したいと思っている者にたいしてだけじゃないのかね？

おれはあんたの心を獲得したいのさ！

書記：  
私の心を？  
一体何のために？

フィリップ：  
（微笑んで）

おれとあんたがそんな関係にあるのが、このおれには我慢できないからさ！

他のみんなは、おれのことを好いてくれている。

あんただけだ。

そうじゃないのは。

言ってくれ！

おれの顔が気に入らないのか？

この声がしゃくに障るのか？

言ってくれ！

おれはどこを改めればいいんだ？

どこに誤りがあるんだ？

改めることは出来ると思う。

おれはまだ若い。

そのことを忘れないでもらいたいな！

書記：

そう何度もおっしゃるんですから、忘れるもんですか！

フィリップ：  
何度も？

書記：

あなたは、言葉ではなく、絶えず、他のすべてのことで、「おれはまだ若いんだ！」とおっしゃってますよ。

フィリップ：  
（落ち着いて）  
それは、つまり……。

書記：  
（穏やかに、淀みなく、丁寧に）  
そうです！

あなたはそのことを主張されています。

あなたの歩き方、座るときのしゃがみ方——まあ、そのまままで！——眼を大きく見開いて耳を澄ます仕草、無意識に微笑まれたとき唇に寄る皺、怒って床を踏み鳴らし、——見かけは軽率ですが——甘えて腕をとらえる仕方が、無言のうちにはっきり示しているのです。

あなたは、ご自分の若さの天性の香気に満足できず、なおも若さをご自分の体に注ぎかけようとされているのです。つまり、あなたは、ご自分の魅力を体からもぎ離し、それを旗のようにご自分の前に押し立てて進み、それですべてを獲得しようとされているのです。

男も女も、老人も若者も、宮廷の貴顕も居酒屋の楽士も、大公の愛顧も乞食のお辞儀も、未通女の赤面も年増の微笑も、あなたの欲求の対象になります。

フィリップ様、あなたはそれを得て、有頂天でよだれを垂らし、思い返しては舌鼓を打つのです。

まあ、それは……。

フィリップ：  
それから？  
続けたまえ！

書記：  
(丁重に)  
もう言いました！  
(自分の仕事に取り組む)

フィリップ：  
(身を起こして)  
君は何と言ったかな？  
「若さの香り」とか「天性の魅力」と言ったね！  
君はそうした甘さを自分の辛辣さに混ぜ込んでいるわけだ。

おれは、自分の若さに満足できると思う。

でも、おれは、もちろん手に入れたい！

君が今列挙したよりもっと多くのものをね。

手綱と拍車、言葉と愛撫で、おれは、自分の馬の心を手に入れたい。

この腕と体で、水の心を手に入れたい。

おれは水を押しのけ、信用している振りをして、水が、それ自身の本性に背いておれを支えるまで、身を委ねる。

おれは、自分の声が歌の中で見事な構成の音階を駆け登ることを覚えるまで、その声に求愛した。おれは手に入れたい！！

生きている者は愛を求める！

死ぬ者だけがその思いを断つんだ！

書記：

あなたは確かにそうおっしゃるが……。

フィリップ：

おれは、君の心を手に入れたいと素直に思っているんだ。

(書記のそばに立って、彼の方に身をかかめる)

「他のことは今や無効であるから」と、君は付け加えたね。

分かるよ。

君は賢明なんだね！

おれが君の心を求める性急さに気が付かないのか？

落ち着きも、分別もない！

おれたちを駆り立てるのは、不安だ！

うぬぼれなんかじゃない！

自分の人生を、食事のコースのように「次」から「次」へと分け、最初の皿が出たときに、空腹を、最後の皿のためにとっておくような人間にはなりたくないんだ。

欲求、享楽、獲得、求婚、子供、権力と名声、——現世に飽き飽きしたとき——安らかな死が、巧妙に配列されて出てくる。

しかし、この人生の饗宴の主催者は、死なのだ！

死は、自分の気の向いたときに食卓を片付けてしまう！

「次」は彼のもので、おれが「今日」と言うほんの一呼吸のうちに過ぎ去る、この「今日」は、ほとんどおれのものではないんだ。

何千もの無駄にされた可能性が、時の流れに乗って、人知れず落ちていく！

兆しはどこにもない！

おれに出会うものは、じっとそのありふれた顔を向ける。おれはそれを激しく求め、それが身動きして愛や憎しみを示すまで、それがおれの運命の戸口に幕を下ろしていないかどうか分かるまで、しつこく迫らなければならないのだ！

書記：

だからあなたは……。

フィリップ：

人生を追求しているんだ！

どんなに早くそれが終わりを告げるか、ご存知かね？  
そのとき、多くの者がおれのことを覚えていてくれるに違いない！

おれを友としていた者の中には、自分の頬の傷で、おれのことを思い出す者もいるだろう。

おれが自慢たらたら短刀を送り付けてやった奴、お金のかわりに慰めの言葉を帽子の中に投げ入れてやった乞食、挨拶もそこそこに目くばせで胴着の紐を解いた窓の女たち。

おれが今までにそんなことをしなかった、君たちのような類の者もいるにはいるが、その他の大勢の者を、おれは、この王国が崩壊したときもまだ繁栄している属州として自分のものにしていくのだ！

君は平然と笑っているが、そんな場合じゃないんだぞ！  
君は何も分かっちゃいない！

書記：

（半ば勝ち誇って、微笑みながら）  
私も、分かりたいとは思っているんですがね。

裁判長：

（入ってくる）

これが計算書だ！

（フィリップに向かって）

君と話し合なさいいかなん！

昨日、君の話し方について、官房長が苦情を言ってきたぞ！

フィリップ：

彼は、大公にではなくてあなたに何を訴えたんですか？  
それに何故、彼は、この私に答弁を求めないんですか？

デジレー：

（入ってきて、彼女に近づくフィリップに向かって）

お待ちなさい！

あの官房長のこと？

そう、御父様のおっしゃることは正しいわ！

あの老人を……。

フィリップ：

あの老人だって！

彼がこのおれよりもずっと早く生まれたってことは、事の正否とは無関係でしょうが！

デジレー：

今は、御父様のおっしゃることを聞いて！

（裁判長とフィリップは暖炉のそばに立っており、書記は、立ち上がって、お辞儀をしながら、デジレーに巻き物を差し出す）

デジレー：

どうもありがとう！

あなたの自作？

書記：

ただの翻訳です。

今年、英国の俳優たちが演じて、あなたをとっても感動させた作品ですよ。

デジレー：

苦勞をかけましたね！

（リボンを解き、冊子の表題を読む）

『年老いた王と三人の恩知らずな娘たち』。

三人？

恩知らずな娘は二人だけだったと思うけど？

書記：

三人目もそうでしたよ。

よくお読み下されば分かります。

デジレー：

これは、御父様が私に下さった贈り物と一緒にしておきましょう。

（贈り物のところへ行く。書記は座って書き物をする）

老下僕：

（入ってきて告げる）

判事様が、閣下にお目にかかりたいと……。

（フィリップは、贈り物を置いたテーブルのそばにいるデジレーの方に行く。以下の出来事のあいだ、デジレーとフィリップは、贈り物を置いたテーブルのそばにいる。フィリップは、薔薇をいくつか拾い集めて、それを花瓶に差す。彼はリュートを手にして、弾こうとする。デジレーは、それをフィリップから取り上げ、しばらく、父と判事のやりとりを耳を傾ける）

裁判長：

（開いたドアを通して見えている判事に向かって、親しげに）  
入りなさい！

判事：

（黒っぽい服を着て、少しめかし込んでいる）

入ります。

こんなに早くお伺いするのが無作法であることは、十分承知しているのですが……。

裁判長：

御覧の通り、私たちはみんな起きていますし、服も着ている。

どうぞ！

（暖炉のそばのひじ掛け椅子を指差す）

判事：

閣下からどうぞ！

来られたんだ！

裁判長：

それじゃ、私から先に。  
(彼は腰を下ろす。その後で、判事も座る)

判事：

その通りです！  
あなたは私が言おうとしていたことを先に言ってしまわれましたね！

判事：

(微笑みながら丁重に)  
私がこんな早い時間に何の用事で来たのか、閣下は恐らくお尋ねになるでしょうね？

裁判長：

どうぞ、話しなさい！  
今日の審理はできるのかい？

裁判長：

ここで君にお目にかかれたのは嬉しい。  
別に何も尋ねはしないよ。

判事：

ご推察下さい！

判事：

(微笑みを絶やさずに)  
ですがねえ！

裁判長：

重要な審理なのか？

裁判長：

本当だよ！

判事：

私はそうは思いません。  
つまり、それはこの私にとって重要なんです！

判事：

(固執して)  
本当ですか？

裁判長：

どういうことなんだ？

裁判長：

(いらいらして)  
そんなにこだわるんなら、「何の用事で来たんだ？」とこちらから質問してあげようじゃないか。

判事：

実は、私、正二時に食事に招かれているんです！

判事：

ほら、私が先程申した通りでしょう！

判事：

私は断われないんです。  
食事に招いてくれたご婦人がそれを許さないでしょう。  
審理が長引くかどうかは、閣下次第なんです。

フィリップ：

こんなに早く何の用で来たんだね！

(デジレーに向かって)

これはカノンなんだよ。

気が付かなかった？

(判事に)

おれたちを拷問にかけるとなると真似はやめて、さっさと話せよ！

裁判長：

(不興を隠し切れずに)

わし次第だって！

これは君の担当じゃないか。

裁判長：

フィリップ！

こちらの判事は、恐らく、わしと相談するために、ここに

すべてを当事者に説明しなさい、そうすれば、彼らは余計な発言を差し控えるだろう。

どっちみち、審理の時間がごく短いのは、はっきりしてるんだから。

判事：

それははっきりしております、閣下！  
シャロレを救うことは出来ません。

デジレー：  
シャロレですって？

判事：  
お嬢様は、彼をご存知なんですか？

デジレー：  
お会いしたことはございません。  
父が昨晚、その方のことを私に話してくれましたの。  
お気の毒な方なんですってね！  
お可哀想に！  
御父様は、老伯爵もご存知なんですか？

裁判長：  
ずっと以前からね！  
彼は貧乏だったが、わしが宮中でみた最も高潔な男だった。  
（判事に別れを告げる）  
一時間後にまた会おう！

判事：  
かしこまりました！  
失礼します！  
その前に、閣下にもう一つお許し頂きたいことがあるんですが。

裁判長：  
何だね？  
君とは何も約束していなかったと思うんだが。

判事：  
堅苦しい話でお耳を煩わせましたことで、お嬢様にお許しを頂きたいと思ひまして。

これは私の本意ではないのです！  
ご婦人方とは別の話をすべきだということは、承知しております。  
われわれ判事は、最高裁判所では、裁判長閣下の例にならって、美術工芸に理解を示しており、自分たちの職務に満足していません。  
私の職業は判事ですが、普段は世俗の人間を自認しております。  
少し大胆な隠喩を使えば、「私はいつも法服と一緒に判事を脱ぐ！」ということになりましょうか。

裁判長：  
（怒りをこらえながら、後半では怒鳴り始める）  
そんなことが出来るなんて、君は幸せだ！  
だが、わしを引き合いに出すのはやめてくれ！  
君の職務は君にとってむなしなものかも知れないが、わしはそうじゃない。

この職務に、わしは一生涯満足してきたんだ！  
この国で、わしは人を裁く最高の立場にいる。  
もし、わしはその職をなおざりにしたら、他の誰がそれを全うできるというんだ！  
金や血や情熱のもつれ合った糸が、わしの前に持ってこられる。  
震えることが許されない指で、わしはそれを解かねばならない。  
それを自分の前から押しのけたり、「今度は勘弁してくれ！」と頼むこともできない。  
人々は、生死を握る鍵をわしの手押し付け、「門番よ、職責を果たすんだ！」という。  
わしの服は、死刑執行人と同じ緋色で、王と同じように、オコジョの毛皮の縁飾りがある！

これが着やすいと思うかね？  
毎朝、わしは目を覚ますと、まず「判事よ、お前は昨日も正しかったか？」と自問するんだ。

職務上だけでなく、生きている人間として！  
「神聖な権利を人間に授けるその手は純潔なのか？」  
わしは、そうだと思っている。

それでも、判決を下すために帽子をかぶるとき——それがどんなに取るに足りぬ事件であっても——わしは身震いする！  
わしはすでに八十歳の老人で、半世紀も判事をしてきたが、それでも身震いする。  
君は——正二時に食事に招待されているという君はどうなんだ！

判事：  
（非常にうろたえて）  
それは誤解です……。

裁判長：  
（行ったり来たりしながら）  
それはこっちが言う科白だ！

デジレー：  
（裁判長が彼女のそばを通るときに、小声で）  
彼は神妙にしてるわ。  
可哀想よ。

裁判長：

(無理やり)

わしは君の心を傷つけない！

ただ、君が、娘に、職務を果たしていない人間、要するに、君のような人間の例としてこのわしを挙げたことが、わしには不愉快なんだ。

わしくらいの年で、こんなに若い子を持てば、誰でも、「この子は、わしのことについて何を知っているのか？」と考えて、自分の人生行路を子供に話したがるものだ。

彼は、自分が苦勞して手に入れた知恵を、子供のポケットにぎっしり詰め込もうとするだろう。

自分が死んだとき、父はこのことについて斯く斯くしかじかの考えを持ってたと、子供に分かるようになる。

判事：

閣下が私のことを恨みに思われず、慈悲をお持ち下さるようお願い致しますののですが？

裁判長：

慈悲だって！

その言葉は使ってくれるな！

わしはその言葉が嫌いだ！

正しい裁きを下すものは、彼の裁きだけで十分なのだ！

裁きが正しくないとき、慈悲が必要になってくる。

判事：

(深々とお辞儀をして)

承知しました、閣下。

バルバラ：

下で楽士さんたちが・・・。

フィリップ：

楽士、宮廷楽士なんです！

バルバラ：

朝食は下に運んでおきました。

裁判長：

(デジレーとフィリップに)

彼らを待たせてはいけない、下に行きなさい。

(書記に)

例の二ページの抜き書きはもう出来たかね？

(デジレーとフィリップは庭に下りる)

書記：

ちょうど終わりました！

バルバラ：

(その間、贈り物を置いた机をひっかき回し、憤慨する)

胸ぐりの大きな肌着、膝上まである靴下。

それに、靴下留めまで！

殿方にこれを見られたら、お嬢様は恥ずかしさで死んでしまわれるに違いありません！

せめて、布をこの上に掛けなくては！

殿方の考えられることなんて皆同じですからね！

(彼女は、品物の一部をかき集め、それをデジレーの部屋に運び込む)

裁判長：

バルバラ！

(書記に向かって、弁解するように)

彼女は、この家に来てもうじき二十年になるんだ！

(彼は、行ったり来たりしてからテーブルのそばで立ち止まり、まだその上に置いてあった手袋をもてあそびながら、物思いにふける)

彼女は、本当は何を言おうとしていたんだろう？

書記：

(書き物をしながら)

彼女はただ、そうした品物が男たちの想像を往々にしてかきたてるということを言おうとしていたんでしょう。

裁判長：

娘はまだ子供なんだから、そんなことはあるまいよ。

書記：

十八歳で子供ですか！

裁判長：

(額に八の字を寄せて)

フィリップや判事たちがそんな無礼な、恥知らずな想像をすると、君は本気で思っているのか？